とある青年の三国志日記　改

となりの山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある青年の三国志日記　改

【Ｎコード】
Ｎ２２７７Ｎ

【作者名】
となりの山田

【あらすじ】
聖フランチェスカ学園に通う山下文也はある朝気が付くと三国志っぽい世界にいた。
で、取り敢えず生き延びようと奮闘するが・・・

※前作とは違い火縄銃は出ません

プロローグ1（前書き）

読者の皆さんお久しぶりです。もしくは初めまして。
となりの山田と申します。
こんな感じの駄文ばかりを書くヘタレですが、どうぞ一つよろしくお願いいたします。
さて、主人公ですが、前作以上のダメ人間にしました。
相変わらずの思いつきで描いてるので、ラストがどうなるのかは分かりません。
がどうか生暖かい目で読んでいただけたらと思っております。

それでは、本編へどうぞ

プロローグ1

プロローグ1

6月11日晴れ　今日から日記をつけることにしたみたいです。

一人の青年がPCゲームに興じていた。
青年の名は山下文也。東京浅草にある聖フランチェスカ学園の2年生だ。
勉強はしたりしなかったりで成績は入学当時からほとんど変わらず常に横ばい。クラスでも中の真ん中と上をいったり来たり。
向上心がまるでなく、目が死んでる。
運動は嫌いなので基本部屋でニート状態。
好きな物は紅茶とゲームと酒。
嫌いな物は勤勉なこと
趣味はゲームおよび昼寝で、最近は戦略系のゲームにこっている
要するに、ダメ人間だということだ。

今日も今日とでカチカチとマウスを操っていると呼び鈴が鳴った。
ちらっと時計を見てみるとちょうど友人と約束したころだった。一時停止してドアを開けると二人の男が立っていた。
右に立ってる奴は北郷一刀。
右隣の部屋に住んでる奴で、剣道部に所属している。
最近、俺たちの憧れである不動先輩となんかイイカンジになっているらしい・・・ムカツク
もう一人は及川・・・あれ、下の名前なんだっけ？・・・まあいいかまあそんな感じのメガネが本体の地味キャラだ。

北郷の幼馴染である。

「遊びに来たぞ～。」

『及川に北郷か、土産はあるんだろうな？とりあえず土産をよこせ。」

「来たとたんに土産を要求するか、食い散らかすぞ」

『やったら最後、痛い目見ることになるぞ・・・。」

「わかってる。ほらよ」

と北郷がポテチの袋を渡した。味はシンプルな薄塩味だった。美味いのでよしとする。

北郷「バリボリ　お前何やってんの？」

俺「ベリベリ　ん？この前発売された三国志の最新バージョン。最近はまっちまってなあ。アニメキャラ入れて遊んでる。」

ちなみにキャラクターは某ヤンデレキャラだったりする。

及川「ボリボリ　フーン、そんなんより他のやらへん？」

俺『そだな　ボリバリ』

ってことで俺たちはスマ〇ラをやり始めた。

ちなみに俺はファ〇コン、及川がピカ〇ュウ、そして北郷がリン〇

だった。
及川「あっ山下てめえ汚ねーぞコラ」
俺『お前が弱いんだよ』
及川「クソッこれでも食らえ、十万ボルト！」
華麗によける俺
俺「フハハハ、当たらんなァ。」
及川「効かない・・・だと？」
俺「死ねいっ、ファル○ォンパアアンチ『
及川「ギャーッ」
ピ○チュウが吹っ飛んで消えた。
だが次の瞬間後ろに回りこんだ北郷が切りかかってくる
俺「なんだと！？」
北郷「くたばれェッ山下ァ！」
ヤバイ、吹っ飛ばされる。そう思った刹那、及川が復活した。
丁度よいので盾になってもらう。
及川「グフウッ、カズピーなんで俺なんだよ！」
北郷「あ、ごめん」
及川が北郷にブッ飛ばされそのまま昇天。
その隙に後ろに回りこんだ俺に北郷が吹っ飛ぶ

俺「ハハハ、見ろ！ゴミが人のようだ。そのままクタバレェ」

北郷「だが断る！」
勝利を確信した瞬間、コントローラーを上手く操って舞台に舞い戻った北郷が切りかかる。

俺『ゲェっ北郷！待て慌てるな。これは孔明の罠だ！』

北郷「一気に叩き潰してやるぜこの必殺連打を食らえ」

俺『グワアア、目が、目がァ～～～！！』
ＨＰに余裕のなかった俺は速攻で吹き飛ばされて昇天。

勝者、北郷一刀。

その後も何回かやっていたのだけど、さすがに飽きてきたのでコーラ飲みながらたわいもない雑談をしていた
俺「そういや北郷、お前不動先輩とはどうなってんだ？」

北郷「どうもなってねえよ。」

俺「ウソ付け、お前この前の明け方、黎明館から出て行くとこを見てた奴がいるぞ」

及川「何ッカズピー、お前そんなことしてたんか！うらやましいぞコラ」

北郷「そんなことしてねえよ。」

俺「なんか怪しいなあ」
そう言いながら俺はゴソゴソと押入れの中をかき回し、そして一本のビンを取り出した。
俺のお気に入り、『偽電気ブラン』だ。
先月、わざわざ京都まで言ってきて買ったものだ。
グラスに氷を放り込んで琥珀色の液体を注ぐ

北郷「未成年の癖に飲酒かよ。」

俺「ウルセエなー、こういう話聞いてるともてない男はストレスたまるんだよ。つーか鬱になりそうだ」

及川「見つかってもしらへんで、寮長アホみたいに強いからな」

及川の言うとおり、男子寮の寮長は冥土服着たロリコンなだけの綺麗な姉ちゃんなのだが、キレたら文字通りナイフを出すことで知られている。
一部には、ザワールドよろしく時間を自由に操ることが出来ると言う噂もある。
半年ほど前に、喫煙していた学生が串刺しにされ、半殺しにされたことは有名な話だ。

俺「大丈夫だ。見つかったら北郷、そしてお前を墓地に送り、二人を生贄にして新たな友人として彰仁を召還する」

北郷「何で俺もなんだよ。及川だけにしろよ」

及川「ヒデエッ！」

俺「何を言う、妥当な配置だろ？」

北郷「酒は飲むは、鬱にはなるは、目は死んでるは、平気で人を見捨てるは・・・最低なダメ人間だな。」

俺「逝ってろ」

北郷「・・・話は変わるが、山下お前確か神隠しに遭ったことがあるそうだな」

俺は一瞬コップを傾ける手を止めた。
俺は2歳の頃から3～4年間くらい神隠しに遭ったことがある。
だが幼かったためだろうか、その頃のことは何も覚えていない。
ただ、この頃から妙に紅茶と酒が好きになっていたんだ。
なぜなのだか未だに思い出せない。

俺「・・・ああ、だけどあの頃のことはなーんも覚えてないんだ。」

北郷「そうか・・・」

及川「ふーん・・・」

それから俺たちは再びたわいの無い会話に戻った。

二人はひとしきり遊んだ後、それぞれの部屋に帰っていった。
その後俺はパソコンをつけて再び三国志をはじめた。
暫くしているうちに眠くなったので、さっさと布団に入って寝るこ

とにした。

プロローグ1（後書き）

作者です。
喫煙と飲酒についての指摘があったため、ちょっと手を加えてみました。
主人公の過去はおいおい語っていくことにします。
しかしドコにいたんでしょうね？

まぁそれは置いといて、
感想、ご意見などがございましたら遠慮なく投稿してください。

プロローグ2　ここドコよ？（前書き）

登場人物紹介

山下文也（１７）
出身地　和歌山県海南市
誕生日　２月２日
好きなモノ　紅茶、上手い酒、煙草、アニメ、平和
嫌いなモノ　運動、不味い酒、戦争、働くこと
年中目が死んでいるダメ人間で、出来る事なら呼吸もしたくないと言うほどのモノグサ。
最近、動機や息切れが起こるようになり、養命酒などを服用している。
性格はかなりオッサンくさく、どこか達観している所がある。
幼少の頃、数年間行方不明になっており、記憶が抜けているらしいのだがその頃からこんな性格になってしまったようだ。
ちなみにこの頃から紅茶と酒が好きになった。
運動は嫌いなのだが、逃げ足だけは誰にも負けない自信がある

（ちなみに、能力を数値化するとこんな感じ）
武：２　知：？　政：９０　魅：？　統：１２

北郷一刀（１７）
出身地　鹿児島県鹿児島市
好きなもの　平凡な日常、平和、女の子にフリフリの服を着させること
嫌いなもの　筋の通らない奴、戦争
いわずと知れた女たらし。
文也の友人

制服の生地・作りがこの世界では見られないものだったことや言葉遣いの違いから、天の御使いと呼ばれて祀り上げられることになるが、本人は利用されていることに関しては基本なんとも思ってはいない。

どっかの国に仕官しているらしい。

なお原作と違って剣道の腕前はかなり高く、そこらの武将とでも十分に戦える。

武：８０　知：７３　政：５３　魅：１２０　統：６８

プロローグ2　ここドコよ？

プロローグ2　ここドコよ？

「・・・意味わかんねえ」
気がつくと荒野の真ん中で寝ていた。
いや、マジで意味わかんねえ。
確かに俺は布団の中で寝てたはずだ。なのになんでこんなとこに？
しかもパジャマだったのになぜか制服きてるし？
何これ、一言で表せば「意味わかんねえ」だよ。
取り敢えず深呼吸でもして落ち着こう・・・
吸って～、吐いて～、吸って～、・・・・・・・
よし、それじゃあ現状を整理しよう。
？朝起きたら荒野の真ん中にいた。
？なぜか制服を着ていた。
？ここドコよ？
以上
大体こんな感じなんだが・・・正直意味不明。
こういうときはどうするか・・・

少し考えてみた。
するといくつか選択肢が浮かんで来た。
?大体このシチュは夢オチなので寝ることにする
?人を探す
?アスファルトに咲く花のようになる
?パスター♪
・・・何コレ?1、2はまだ分かるよ?でも3と4は何?意味不明
なんだけど
作者の頭大丈夫か?なんか本気心配になってきたぞ。
まあそれは置いといて、どれにするか・・・3、4は論外だし、2
はいいけど近くに人はいなさそうだし・・・一番妥当なのは1かな?
ってことで、?の「寝る」に決定。
早速寝る事にした。
俺は現実世界へと帰り、いつも通りの平凡なニート生活をおくった。
そしてその横で作者が・・・
『とある青年の三国志日記「完結」!次回作にご期待ください!!』
って言ってる・・・

・・・・・・・・・

夢を見た。

・・・数時間後・・・

あー寝た寝た。
確か今日は数学があったな〜、あの鬱陶しいジジイの授業受けねえといけないのかァ
マジ鬱になるわー・・・って、ん？

だんだん澄んで来る視界にはさっきと同じく一面の荒野が広がっていた。

「何でだよッ！？」

さっきのシュチュだと大体夢から覚めるってオチだぞつかさっき完結しただろ！？

『プロローグで終わらせるわけないじゃないですか？　ｂｙ作者』

やかましいッ！

バキッ

『アベシッ♪もっとやってくれ～』

もっともっとと懇願する作者を無視し、俺はこれからどうするか考えることにした。

しかしどうすっかな～、ドMな三文文士のせいで訳わかんねえ所に来ちまったからなあ

といってもやることは一つ

？の『人を探す』しかないよなァ・・・ハァ～ッと思わず溜息をついた。

しかし・・・二回も神隠しに遭うような人間なんてそういないだろうなぁ

そう思いながらまたしても溜息をついた。

（ヤレヤレ、まあ町なり村なりを探せばなんとかなるだろう）と思い、俺はゆっくりと歩き始めた。

真っ赤になった空を見上げながら

＊＊＊＊＊＊

時間は少し戻って、とある城の中

「ごめんなさい、華琳さま～。また華琳さまのお召し物を汚してしまいましたぁ～」

「いけない子ね、桂花は。また、お仕置きが必要そうね」

「あ～ん、ゆるしてくださ～い、華琳さま～♪」

華琳と呼ばれた少女は桂花と呼ばれた少女に自らの足を差し出し、

「舐めなさい」

と素気なく言った。

すると桂花と呼ばれた少女は陶然とした目でいかにも嬉しそうにその足をペロペロと舐めだした・・・

こんな感じで二人の少女が寝台でイチャついていた。
一人は猫耳フードをかぶり、もう一人は骸骨の髪飾りをした金髪の少女だった。
金髪の少女の名は曹操。
三国のうち魏を打ち立てた英雄だ。
猫耳フードの少女の名は荀?。
生涯、曹操に付き従った軍師兼愛人?である
二人とも顔が上気していており、どうやらこれから本番に突入しようとしているようだった。
「華琳さまぁ・・・」

「桂花・・・」

いよいよ曹操が荀?の服を脱がそうとしたその時、

「太守さま、すいませんけど判子もらえます?」

と、不意に白衣を着た一人の男が現れた。
男の名は王弼。
現在ここで下級役人をしている。

その両手には大量の書類があった。

それを見た二人の少女は一瞬あっけに取られたが、すぐにこめかみ

に青筋を立て、震えだした。
特に荀？の怒りは凄まじいようだ。

「王弼！あんたなんでこんな時に入ってくるのよ！」

「？、いや、こんな時って言われましても・・・」

「本当に意味が分からないの？」

「はい。」

「そう・・・」

曹操は小さくうなずいた。
そして、息を大きく吸い・・・

「今すぐ出て行きなさーーーーーいッ！！」

と、城内全域に響き渡る大声を発した。

そして王弼は着の身着のままで城から放り出された。

王弼はなんでだろうな～？と考えながら、仕方ないので煙管片手に歩き出した。

プロローグ2　ここドコよ？（後書き）

作者です。
こんな感じのヘタレなものになりました。
さて、主人公ですがかなりのダメ人間になりました。
それに比べて北郷君、かなり優秀。
いきなりこんな感じになってしまい、どう収拾させるか猛烈に悩んでいたりします。

感想、ご意見などがございましたら遠慮なく投稿してください。

第1章　追い剥ぎに遭いました（前書き）

登場人物紹介

王弼（３０）
字　輔嗣
出身地　エン州山陽郡
誕生日　７月１３日
好きなもの　歴史、考古学、平和
嫌いなもの　戦乱、傲慢な奴
曹操の下で下級役人として働いていたのだが、主のお楽しみを邪魔したことが原因で放り出される。
ちなみにヘビースモーカーでもある
性格としてはかなり鈍感で、おまけにＫＹ。
若い頃色々あったらしく、截拳道の達人だったりする。
武：１０３　知：１０５　政：１２０　魅：１０１

第1章　追い剥ぎに遭いました

前回までのあらすじ

寝てたら作者に拉致られた。　以上

某日　晴れ　追い剥ぎに遭いました

「オイ、兄ちゃんいい加減に観念しろや」

・・・えーと、簡単に現状を説明しよう。
道歩いてたら黄色いバンダナつけたデブ、チビ、オッサンの三人組と鉢合わせになって、いきなり持ってる物全部よこせとか言われた。断ったら、なんか刀を突きつけてきた。
で、今に至る。

『オイッ聞いてんのか？』

「ああ、すいません聞いてませんでした。」

『あのなあ、人の話はちゃんと聞けって親から言われなかったか？』
追い剥ぎ？から説教てしまった。結構貴重な体験だな

「ハア、小さい頃によく言われました・・・ところでなんでしたっ

け？モッカイ話してください。」

すると、追い剥ぎのオッサンはハァ～・・と溜息をついた。
この人も相当疲れてるんだな、やはり社会と言うものはそれなりに厳しいんだろう
俺もいずれはこうなるのかな？

『だからな、さっきから言ってるだろ？命が惜しけりゃお前の持ってる物全部寄越せって』

「ですから、そのことでしたらお断りしてるじゃないですか。ちなみに死にたくもありません。」

『どっちかはっきりしろよお前』

と、押し問答を続ける俺たち。
かれこれ一時間以上こんな感じだ。
暖簾に腕押しってこういうことを言うのかなあ？
だがすぐに均衡は崩れた。
『兄貴ィ、もう力ずくで奪っちまいましょうぜ』
とチビが言ったのが原因だった。
オノレ、トッチャンボウヤの分際ででしゃばりやがって

『そうだよ初めからそうしてりゃァ良かったんだよ。何で気付かなかったんだよ俺！』

（それはあなたが馬鹿だからだよ）
俺だったら話なぞせず問答無用でやっている。」

『ウルセエっ、デク、チビ、こいつを抑えろ』

あ、聞こえておいででしたか
読心術でもしていたんだろうか？
だとしたらスゲえな

『ヘイ、兄貴。』

『お、大人しくするんだな』

といって俺を押さえにかかる二人。
面白い・・・相手してやろうじゃあないか

・・・数秒後

ボロボロになって倒れているオッサン他2名。

「ククククク・・・手前ら何ざ俺の敵じゃあねえんだよォ！ギャハハハ・・・」

俺はコイツらの上に立ってこんな感じで高笑いしていた・・・

・・・・

『・・・オ～イ、大丈夫かお前？』
ふと気が付くと目の前には不思議そうな顔をしたオッサンとチビの姿があった。
どうやら妄想の世界にトリップしていたみたいだ。
後ろのデブはと言うと、可愛そうな者を見るような目でこっちを見

つめていた。
そこ、哀れむような目で見ない！泣きたくなるだろ！半泣きだけど

『なんか調子狂うんだが・・・まあ良い、おいっクソガキ、もう容赦しねえぞ！」

剣を振り上げるオッサン
でもこのまま黙って身包み剥がれたら死んじゃう上に全裸だから困る。
残念ながら露出なんて趣味は俺にはない。仕方がないので、ここは勝てるとは思えないけど抵抗してみることにする
相手は三人、しかも俺は今後ろから肩を押さえられてる。だが、他のとこは自由だ。
まずは・・・目の前にいるおっさん！
切りかかってくるオッサンの腰の辺りに渾身のけりを入れる。
ギュチャッ！？て音がした。
直後に倒れて、「グブフォオオオｗｗｗｗｗ＃＄，％♂！」とか呻きながら辺りを転げまわり、事切れた。
どうやらモロ股間に入ってしまったようだ。

・・・大丈夫、だよな？たとえ大丈夫じゃなくても正当防衛だ。俺は悪くない！

『テメエ、よくも兄貴を！』
怒りに震えながらチビが刀を抜く。
抑えられてる以上、動くことはできない。
足での抵抗は・・・無理。体が自由にならないと。
てことで俺を抑えているデブの腕に噛み付く
『痛ッ！』

痛みで思わず腕が離れた瞬間、俺はダッシュで剣戟をよける。
そしてわき腹にパンチをくれてやる。
『ギエッ』
チビはわき腹を押さえながら前のめりに倒れた。
残ったのはデブだけだから後は一目散に・・・と思いながらチラリと後ろを振り向くと、デブが両手を広げて覆いかぶさってきた。
体重差はおそらく1：3。目の前にいるので逃げることも間に合わない。
さすがに俺も、もうダメだと思って目を閉じた。
直後、ガスッという音がした。
だがいつまで経っても重みが来ない。
どうなってんだ？と思い、恐る恐る目を開けてみると目の前にはデブが倒れていて、白衣を着たオッサンが立っていた。

『やれやれ、どうやら間に合ったみたいだ』

男は額の汗を拭きながらつぶやいた。
どうやら俺が絡まれてるのを見て助けに来てくれたようだ。
とりあえずお礼を言うことにする。礼儀は大事だ

「おかげで助かりました。ありがとうございます。」
そう言って俺は頭を下げた。
するとオッサンは微笑み
『いや、気にすることはない。怪我はないかい？』
と言った。

それに俺は首を振った
「ええ、おかげさまで」

『そうか、よかった。』

と言った。

ああ、そうだった。そう言えばここが何所なのかまだ知らなかったな。

丁度いい

「あの、つかぬ事をお聞きしますがここは何所であなたは誰なのでしょうか？」

『ん？ここはエン州の外れだな。で、僕は王弼って言うんだ』

エン州？そんなとこあったっけ？

「えっと、じゃあここは日本じゃないんですか？」

『ニホン？ナニソレ美味しいの？』

「・・・」

どうやらここは日本ですらないみたいだ。

じゃあドコなんだ？もしかして外国・・・？

「じゃあ、ここはなんていう国なんでしょうか？」

『漢って言うんだけど・・・もしかして知らなかった？』

「・・・冗談でしょ？」

『冗談じゃないよ』

顔が真っ青になった。

見た感じこのこの人がウソをついてるようには見えない。

夢でないことも昨日のうちに確認した。
と言うことは間違いなくこれは現実だろう。
俺は本当に2千年くらい昔にタイムスリップしてしまったみたいだ。
マジデヤバイヨ。イヤホント
まあいい、とにかく今は考えないと
さてどう『オ～イ』するか・・・

突然王弼さんから声がかかった。

「はい！何でしょう」

『お取り込み中悪いんだけど、君は何て言うの？』
言われてみれば尤もだ。

「すみません、俺は山下文也といいます。」

『山下・・・か、聞いたことない名前だな。姓が山で名が下、字が文也・・・と言った所か？』

「いえ、俺は異国の人間でしてね、字がないのです。ですから、姓が山下で名を文也といいます。文也と呼んでください。」
外国人ってことは間違いないしな、それに未来から来たなんて与太話信じるような奴はいないだろうからな。

『・・・成程な、確かにそのキラキラ光る身なりを見ればこの国の者とは言い難いしね。』
どうやら納得してくれたようだ。
完全に信用されたわけではないようだけど。

「ところで王弼さん」

『なんだい？』

「この近くに町はあるのでしょうか？実は道に迷ってしまっていまして」

『ふむ、ちょうど僕も町に向かうつもだったし、せっかくだから一緒に行くか？
またぞろ盗賊に襲われたらたまったものじゃあないだろ？』

「ええ、お願いします。」
旅は道ずれ世は情け・・・か
こういうのも良いのかも知れないな

第1章　追い剥ぎに遭いました（後書き）

作者です。
王弼さんを考えてみましたが、呂布と孔明＋αした最強のチートキャラになってしまいました。
こういう感じなので、すでに破綻寸前です。かなり不味いです。
ですので余り彼は前線には出さず、補助的キャラにしようと思います。

ご意見、ご感想がありましたら、遠慮なく投稿してください

第2章　助手になりました

西暦１８０年４月１１日　晴れ　　助手になりました

日が真上に来ようとしていた頃だろうか、俺たちの視線の先に城壁が見えた。

『あれが、山陽の街だよ。僕の故郷だ』

「山陽・・・」

城壁を見た時やっぱり夢とかじゃないんだな、と思った。

俺は、どこか今いる時間が嘘であることを期待していたのかもしれない

だが今あるのは偽りではなく現実だった。

現実である以上、逃避した所で何の利益もない。

そんなことをぼんやりと考えながら歩いているといつの間にか城のすぐ傍に来ていた。

「・・・」

目の前には巨大な城壁がそびえていた。

でかい――

その一言に尽きた。
基本的に中国の城と言うか町は全体を城壁によって囲まれた物だからでかいのは当たり前なのだが、それにしてもでかい。
端から端まで数百メートルはあるだろうか？
この時代における最大の町である洛陽はここよりもさらに広いことを考えると、よくもまあこんなにでかい物を作ったものだ。
と言った感じに驚くと言うより呆れてしまうのは自分だけだろうか？
中国人のパワー、恐るべし

町は真ん中を一本の大通りが貫き、それを基準に碁盤の目のように道が広がっていた。
修学旅行の時に行った京都みたいな感じだ。
大通りには商店や宿屋などが軒を連ねている。
だが不思議なことに、そこは閑散としていた。
昼間なのに扉を閉ざしている店も少なくない。

「王弼さん、なんですかコレ？なんかすっごい町が閑散としてるンですけど」

すると王弼は少し悲しそうな目をして
『残念なんだけど、これがこの国の現実なんだよ。』
と、静かにに言った。
そして彼は話し始めた。
今の漢王朝の現状を

彼の話によると、俺の知ってる史実の後漢末期と対して変わらなかった。
中央では宦官、外戚、官僚の三つ巴の政争で政治がおろそかになり、その余波で地方政治が滅茶苦茶になったのだ。
そのため、税は異常なくらいに上がるわ、治安が乱れて盗賊が跋扈するようにはなるわ、と言った感じで散々な状況なのだと言う。
この町にも先日盗賊が押し寄せ、多くの民間人が犠牲になった。
その上、町の県令もどっかに消えてしまっており、現在は無政府状態なのだとか
まったく、ひどい世の中だ。
今の日本もそれなりだけど、この時代はそれとは比べ物にならないほどひどい。
しかし、三国志時代の直前に来るとはな・・・まいったな
綺麗なお花畑と川が見えるのは気のせいだとしても
死亡フラグが立っていることは多分気のせいじゃないだろう。
先日買った「風〇録」がまだ途中だったんだがなぁ
まぁ、来ちまったもんは仕方ない。
たいていこういうのは最終的には帰るって奴だからな、帰れるようになるまでせいぜい死なない程度に生きるしかないのかもしれない。
望み薄だけど・・・

「ひどい世の中ですね」

「全くだよ。自分の国の悪い部分を見せてしまったね。」

「いえ、気にしないでください」

「・・・ところで、これから君はどうするんだい？」

「あっ・・・」

そう言えば俺この時代のことほとんど知らないんだった。
歴史としてはほんのちょっと。
暫くして乱世の世の中になって、国は3つに分裂してしまい、最終的に晋という国になりましたと言ったくらいだろう。
しかし文化や政治に対してはほとんど何も知らない。
それに一番厄介なのが文字が全く分からないといったことだ。
この時代と今の時代とでは全く漢字の用法も違うし読み方も違う。
いくら文盲の人が多かった時代とはいえ、やはり文字は覚えておいたほうがいい。
さて、どうすべきか・・・取り敢えず、まず文字を勉強しよう。

「あの、俺この国のことが全く分からないんでせめて文字だけでも勉強したいんですが・・・」

「じゃあ丁度よかったよ」

うん？

「僕は今度、塾でも開こうかと思っているんだけどね、助手がいないんだよ。良かったら手伝ってくれないかな？文字はその間に覚えれば良いしね」

「どうかな？」

「あの、お金とかは・・・」

「タダだけど・・・どうかな？」

「お願いします！！」
ああ、なるほど、そうすればある程度の文法も理解できるしかも唯で。
これを受けずして置くべきか！
「すごい食いつきぶりだね、と言うかちょっと離れてくれないかな？顔が近いよ」
「あ、すいません」
俺は慌てて一歩下がった。

「じゃあ、契約成立だね。」
そう言って王弼さんは右手を差し出した。
「よろしくお願いします。」
俺も右手を出して握手をした。

こうして俺は暫くの間、塾を開くことにした王弼さんの下で助手として働くことになった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１８３年８月６日　エン州山陽郡の町

それからあっという間に４年近くが経過した。
王弼さんは故郷であるこの町で塾を営んでおり、俺は助手として働いている
当時全くの手探りだった文字の読み書きはある程度マスターし、今では教えるほうに回っている。

「だから、この字は・・・」

「文兄ちゃんこれじゃあわかんないよー」

「ああ、ごめん」

・・・まだ分かりやすく教えられてはいないけど

夕方になり、塾が終わったので俺は町に買い物に出かけた。
ここ3～4年、世の中は歴史の通りに進みつつあり、物騒になりつつあるが奇跡的にこの町の周辺は安定しており、町は結構活気がある。

「文、仕事は終わったのかい？」
路地でいつも野菜を売っているおばちゃんが声をかけてきた。

「ええ、」

「どうだい？なんか買っていかないかい？」

「う～ん・・・じゃあそこの人参をください」

「毎度」
そういうとおばさんは人参を青梗菜と一緒に手渡した。
「え？」

「おまけだよ」

「ありがとうございます。」
俺は丁寧に頭を下げ、確か豚肉があったからな、八宝菜でもするか・・・
そう思いながら野菜を抱えて家へと帰って行った。
家に変えると王弼さんの姿があった。
「ああ、文也君かい」

「ただいま戻りました。すぐ夕食の用意をしますね」

「ああ、頼むよ」

かまどに行き、火をおこし、中華鍋を振るい始めた・・・。
俺の生活は充実していた。

第2章　助手になりました（後書き）

作者です。
第４話もこんな感じの駄文になりました
さて、これから先この作品はどうなるのか？
と言う疑問が頭の奥にチラついていたりしますが、そんなモノは無視してひたすら思いつきと勢いに身を任せて書くことにします。
感想、ご意見、などがございましたら遠慮なく投稿してください

第3章　戦乱の渦

西暦１８４年初めの段階において黄巾党は数万程度の勢力でしかなかった。もしもこの段階で漢王朝が本気で動いていたとしたら、この叛乱は史実よりも早期に終結し、漢王朝も史実以上に延命できた可能性が高い。だが、当初中央ではこのこと自体が完全に無視される形となった。原因としては、党錮の禁によって有能な官吏たちが軒並み中央政府からはずれていたこと。そして彼らの代わりに朝廷を実質支配していた宦官がこの叛乱を甘く見ていたことなどが挙げられる。

いずれにせよ、この農民反乱が漢王朝が倒れる大きな遠因となり、曹操、董卓、孫策などの諸侯が躍進し、停滞しつつあった時代を大きく変化させる原因となったことは言うまでも無い・・・。

『漢の終焉と三国志』河野武著　より抜粋

・・・どうも、文也です。
世の中が物騒になってきました。
一昨日も盗賊がこの近くの村を襲撃したとのことです。
怖いですねー、イヤ本当
でも世の中に関係なく仕事は忙しいです。
どういうわけか徹夜続きです。
最近じゃ王弼さんも城のほうで仕事に呼ばれて忙しいし・・・
今も・・・って、コラッ何勝手にテストの解答覗いてるの?!ダメだろ
・・・こんな感じでマジで忙しいです。
もう働きたくないでござる

てな感じで授業が終わった後、近所の店で買った饅頭を食べながら歩いていると、声が聞こえた。

『あの、スイマセン』

（誰だ？）

振り向くとそこにはセミロングの黒髪を持つ少女が立っていた。

『宿屋を教えてはもらえないでしょうか？』

宿屋か、そう言えば一月ぐらい前に主人のばあさんが死んで潰れたんだっけ

そのことを少女に話すと、少女はすっかり落胆していた。
もう日も落ちるし今夜は野宿をするほか無いのだろうが・・・ちょっとかわいそうに思えた。

「・・・なんならウチに泊まってくかい？」

『え・・・いいんですか？』

「ああ、どうせ家には私しかいないし」

『ありがとうございます！・・・お金はいくらくらいでしょう？』

「ん？別にお金は良いよ。でもその代わり最近の情勢を教えてくれればそれでいい。」

こんな田舎町では受信できる情報はたかが知れている。
この時代、民衆の主な情報源は各地を渡り歩く商人や旅人に限られていた。

「所で君は？」

『申し送れました。私は王平といいます。』

王平！
その名を聞いた文也は内心驚愕した。
三国時代の半ばから後半ごろに活躍した蜀の名将だったからだ。

（アレ？でも王平って女だっけ？・・・まあいいや、同名くらいいるだろうからな人違いだろ）

そう思い直し、文也は少女を自分の家に案内することにした。

第3章　戦乱の渦（後書き）

読者の皆様、お久しぶりでございます。作者です。ちょっと諸事情（ゲームの消化）でほぼ一ヶ月ぶりの投稿となりました。・・・が、かなりひどい出来です。
うん、まさに駄作。
ちなみに、主人公の一人称を「私」にし、年代いじくって年ももう少し取らせました。

次回からちょっと三国志らしくなっていきます。

感想、ご意見などがございましたら遠慮なくコメントしてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2277n/

とある青年の三国志日記　改

2011年1月26日04時10分発行